

スポーツマンシップマネジメントの必要性に関する考察 ～早稲田大学体育各部を事例として～

A study on the necessity of the sports man ship management

1K04A113

指導教員

主査 作野誠一先生

篠 雄也

副査 宮内孝知先生

【諸言および研究目的】

大学運動部員の不祥事が多発している。その度に原因として挙げられるのは、部員数に対する指導者数の少なさによる管理の限界とエリート選手の狭くゆがんだ価値観という2つの要因であった。

一方で、少子化社会を経て、2007年大学全入時代が到来した日本ではスポーツ関連学部が各地で乱立し、エリート選手を多く獲得していることから、その要因は拡大していると推測される。したがって、スポーツマンシップのマネジメントは緊急務であると言える。

また、何故、今スポーツマンシップマネジメント(=運動部員としての振る舞いの管理)なのか。という問いは、現代社会の中で組織の成績だけではなく、どの組織にも社会的な責任が求められている背景がある。広瀬(1999)は、それをスポーツのソーシャルパフォーマンスと呼んでいる。大学は試合で勝利すること以外に体育会活動を通して生徒に何を不得欲しいのか、その理念・施策があつてしかるべきではないか。

本論文は体育会におけるスポーツマンシップを身に付けさせる方法、また体育会における組織マネジメントの実態を明らかにし、体育会とその統括組織に具体的な施策の提言を目的とする。

【研究方法】

本研究の方法は、2007年度早稲田大学体育各部(以下、体育各部)の主務及びそれに順ずる者5人への半構造化面接調査方法を用いて現状

を調査し、検証するとした。質問事項は、過去に不祥事が起こった体育会・スポーツ団体、また企業における不祥事から原因とされるものを抽出して、基本情報、組織の理念、不祥事の防止策として部・学連(協会)・学校が行っているものとした。

また、早稲田大学において体育会を統括する組織である早稲田大学競技スポーツセンターの事務局長にも協力頂き、体育各部マネジメントの現状と課題を聞かせてもらった。

【研究結果】

体育各部のマネジメントは各体育各部に独自に存在する。その中には、部の持つ理念から派生した細かな部則などをルールと、それを徹底する部員が存在することで、マネジメント方法として有効だと判断できるものもある。しかしながら、その施策は体育各部間に個体差があり、部則などが存在しない体育各部もあり、早稲田大学全体としては不十分である。

一方で、競技スポーツセンターでは体育各部の幹部や指導者に対してOff-J-T(Off the Job Training)を行っていることが明らかになった。しかし、その効果は調査によるとあまり高くないと判断できる。また、Off-J-T効果が低い理由の1つとしてOBなどの実際に体育会を運営組織と大学および競技スポーツセンターの組織間でコンフリクトが存在し、体育会に対する大学の介入が困難になっていることが明らかになった。また、日本におけるスポーツの歴史的課題に根を持つスポーツと体育の取り違い、および大学スポーツが大学の経営

資源の1つなる中で、大学スポーツの存在意義が確認されないまま今日にいたることがわかった。

【考察と課題】

大学側は早稲田スポーツの明確な理念を示せていない現状がある。それ故に、各体育会内の解釈に齟齬が生まれている。一方で学校が理念を示せなくとも、各体育会やそのOB会組織がその役割を補完している場合もある。確かに、施策とし

て学校側が行うべきこと、部や学連が行うべきことの選定が必要ではあるが、学校と体育会(OB会)の中で組織間コンフリクトが生まれ、それを阻害しているのであれば、その解決の為にも至上目標(上位概念)を示すことが必要であると言えるだろう。また、それは危機管理とブランディングという意味でも今後大学スポーツが日本でも一つの産業となっていく中で急務であると思われる。